

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席員
主研究員17 都市の景観を
考える

ただでさえ少子化するまちに、さらに最近
は子どもの声さえも耳
にしなくなっていると
感じるのは筆者だけだ
ろうか。

私事で恐縮である
が、半世紀前の筆者の
子ども時代を振り返
ると、今さらながらに勉
強とは無縁の幼少期で
あった。

学校から帰ると、バ
ットとグローブを持っ
て一目散に近くのお寺
の境内に向かう日々。
夏休みともなれば、近
くの千曲川の岸辺のや
なぎの大木を切り倒
し、木と木の間に梁を
かけて床を造り、素っ
裸で千曲川に入って魚
を採り、近くの畑から

スイカやウリを無断で
拝借し、腹一杯食べ尽
くし、真つ暗になるま
で悪友達と遊び呆（ぼ
う）ける毎日であった。
それを思うと、つく
づく今の子どもたちは
ある意味で可愛そうと
感じるのは筆者と同世
代の読者諸兄ではない
だろうか。

幼少期から自分専用
の部屋を与えられ、そ
の部屋にはTVもラジ
オカセットもゲーム機
も何もかも完備され、
そして学校から帰ると
すぐさま塾へ直行、も
ちろんその送迎は親の
役割である。

筆者らの時代、親は
畑仕事に忙殺され、子
どもをかまっている暇
もなかったというのが
当時の現実であり、ま
た今のような世情不安
も皆無だった。

しかし、今の子ども
達に最も欠けていると
いわれるのが、協調性、
コミュニケーション能
力（※）、そして忍耐力、
自尊心といった「非認
知能力」といわれてい
る。

これらの能力は、幼
少期に自然に親しみ、
自発的に遊ぶことで育
まれるという研究結果
もあるほどだ。

子どもたちはいずれ
成長し、社会に巣立つ。
いくら優秀な学歴をも

ってしても社会に同化
できず、定職にも着け
ず、孤立する成年が急
増している現代、この
世相がまちの活力増進
に逆行する一つの要因
でもある。（続き）

※以下、ベネッセ教
育総合研究所と朝日新
聞社による学校の教育
内容に関する共同調査
より抜粋。「学校は教
科に関する知識の習得
を重視すべき」（A）、
「学校は将来、社会で
活用できる力（論理的
思考力、コミュニケー
ション力など）を重視
すべき」（B）のうち、
「Bに近い」「どちらか
といえばBに近い」と
回答した保護者の比率
は、2018年は13年
調査時から4.7%増
加し、71.4%となっ
た。一方、「Aに近い」
「どちらかといえばA
に近い」を合わせると
24.2%。

清水 秀幸氏（しみ
ず・ひでゆき）195
2年長野市生まれ、76
年明治大学政経学部政
治学科卒。2013年
6月株式会社守谷商會
役員を退任し、同年7
月株式会社さくら都市
総合研究所を設立。長
野市都市計画審議会専
門委員ほか6委員、そ
の他各地方自治体の審
議員・部会員を兼任。
現在同研究所社長